



筑紫女学園大学リポジット

On the Raison D'etre of Women's Universities:
From the Perspectives of Education and
Administration

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 裕子, TAKAHASHI, Yuko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/316

【公開講演会報告】

「女子大学の存在意義

— 教学及びアドミニストレーションの両面から —」

津田塾大学教授・研究支援担当学長特別補佐 高橋 裕子

On the Reason D'être of Women's Universities : From the Perspectives of Education and Administration

Yuko TAKAHASHI; Tsuda College, Professor

／ Vice President for Research Support

主催：女子教育研究会

Chikujō Association for the University Education of Women

(代表：高山 百合子〈現代教養学科〉)

【本公開講演会について】

私共「女子教育研究会」の平成21（2009）年度の活動の一環として、津田塾大学高橋裕子氏（学芸学部教授・研究支援担当学長特別補佐）を講師にお招きして開催した公開講演会について報告する（後掲「2009年度女子教育研究会 主な活動記録」参照。以下「活動記録」）。

この公開講演会は、平成22（2010）年3月25日、標記の題で、本学教職員を主な対象に開催した。今日、女子大学はどのようにしてその特色を打ち出し、女子教育に貢献していくべきなのか——日本社会で女性がおかれている現状を振り返りながら、教学とアドミニストレーションの両面から女子大学が取り組むべき課題を考えるというテーマの下、2時間以上に亘って、講演およびその後の質疑応答が活発に行われた。

このたびの講演会は、昨年10月に開催された「武庫川学院創立70周年記念シンポジウム」への参加（聴講）がきっかけとなって実現したものである。その折の高橋裕子氏の基調講演には、女子大学の望ましいあり方が明確に示されており、示唆に富むと同時に、我々女子大学に奉職する者をもエンパワーする力があった（「活動記録」参照）。本学でのご講演をお願いした所以である。

一学内研究会主催の講演会であったが、公開講演会開催当日は、幸いにも学長以下教学側の主

な役職者、事務局長、さらには同窓会会長を含め、幅広い参加者を得ることができた。これもひとえに、女子大学の存在意義は女子大学全体のレベルアップに負うところが大きいとして、積極的に女子大学間の連携を図って下さった高橋氏のご熱意によるものであろう。年度末の慌ただしい時期に、ご多忙の中わざわざ本学まで足を延ばして下さいました高橋氏に、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

本稿では、当日の講演内容を、津田塾大学での「ライティングセンター」(平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」)の取組に重点を置いて紹介する(「5. 津田塾大学での取組—ライティングセンター」参照)。この第5章は、本校の活動に直接示唆を与えるものとして、文末を「です・ます調」にし、当日のご講演の雰囲気になるべく残すようにまとめられている。他のトピックについては、当日のレジюмеに従いながら、適宜略述して全容をまとめるという方針で高橋氏のお手をわずらわせた。尚、詳細については下記参考文献もご参照願いたい。

《高山百合子》

【参考文献】

学校法人武庫川学院『武庫川学院創立70周年記念シンポジウム記録集・女子大学で学ぶとは』
基調講演：高橋裕子「女子大学だからできること：女性を伸ばす〈学び〉の環境」(平成22〈2010〉
年3月)
高橋裕子「女子大学だからできること—女性を伸ばす〈学び〉の環境」(『武庫川女子大学教育研究
所 研究レポート』第40号、3-30頁) 2010.



高橋裕子先生



講演会風景

[講師紹介]

高橋裕子氏；津田塾大学学芸学部英文学科教授（教育史・社会史）

津田塾大学卒。筑波大学大学院（修士）、カンザス大学大学院（修士・博士）修了。

研究分野は、アメリカ社会史（家族史・女性史・教育史、ジェンダー論）など。米国における女性の高等教育史や日米の社会史の視点からの津田梅子と女子英学塾などをテーマとして研究に取り組む。2003年『津田梅子の社会史』でアメリカ学会・清水博賞受賞。

津田塾大学で、2005年から広報・学生担当学長補佐、学務担当学長補佐、研究支援担当学長特別補佐を歴任。また、女性研究者支援センター長など複数の役職を兼務し、大学運営に関わる。

[講演内容]

1. 自己紹介にかえて— 私自身の女子大学体験:「ロールモデルに支えられて」

[キーワード；キャリアの方向付け、女子大学、ロールモデル、世代間の連携、ライフスタイル]

私自身のキャリアパスを考える時に、女子大学はどのような役割を果たしていただろうか。津田塾大学での4年間の意味を簡単にまとめるならば、次の5つぐらいのことになるだろう。

- (1) この4年間でキャリアの方向づけをする重要な時間であって、
- (2) それがしかも一生続くようなインパクトを与える、そのようなライフステージというのが18歳から22・23歳くらいであり、
- (3) 日常生活のなかでロールモデルに直接触れるということ——同世代間のロールモデルについても、教職員といった中高年の異世代間のロールモデルについても——それがきわめて重要であった。
- (4) 世代連携の可能性ということで言えば、若い学生にとって中高年の女性がどのようなライフスタイルを切り開いているのかということ、その多様性に出会えるということが非常に重要なことであった。
- (5) 一言で言うならば、私自身が学生として過ごした女子大学の4年間というのは、とてもスペシャルな時間であった。研究意欲のある者なら誰でも積極的に受け入れるという肯定的なイメージが大学に溢れていて、18歳から22歳という柔軟な時期に多くの女性研究者の姿を間近に見ながら過ごせたことが、私の研究者としての第1歩を形作ったと考えている。

そういったこともあって、女子大学の歴史——私自身は、津田梅子がどのようにして女子英学塾を建学するに至ったのかということ、アメリカ社会史の観点から読み解いて行くという研究に着手するようになり、そして今、女子大学で働く立場にもなっている。

【参考文献】

高橋裕子「ロールモデルに支えられて」(柏木恵子／国立女性教育会館 女性研究者ネットワーク支援プロジェクト編『キャリアを拓く—女性研究者のあゆみ』ドメス出版、平成17(2005)年8月)

2. 日本における女性と雇用の現状—『男女共同参画白書』平成21年版から

[キーワード；雇用における男女間格差、ジェンダー・ギャップ指数、国連の勧告]

日本における女性と雇用の現状ということで、『男女共同参画白書』平成21年版から高等教育に関係する重要な部分を見ていきたい。

まず、日本の女性の労働力率の変化について。M字型カーブと言われるが、結婚や出産・育児というライフイベントによって退職しないという女性のライフスタイルがある国々がある一方、

日本や韓国では、30代に入るとかなりの女性が今も退職している。M字型の底は浅くなってきているけれども、現代においてもMの字を描いている。

また、男性と比べて女性は、いまだもって正規の雇用についていない割合が非常に高いということがこの最新の『男女共同参画白書』から見てとれる。したがって女性の給与がまだ低くおさえられ、当然、役職に就く女性が少ない結果となっている。

各分野における指導的地位に女性が占める割合を10年前との比較で見ると、それぞれの分野で少しずつ増加してきてはいる。研究者は約3ポイントだけ伸びている。図の1番下から弁護士、歯科医師、医師、研究者と続いているが、これら4つの分野で直近値で比較すると研究者は最下位。研究者はまだ少ないところに位置している。

審議会のように任期が短くて給与も生涯賃金などを保証するような必要がない部分では3割を超えるところまで上昇してきているが、国家公務員のI種の割合、これも増えてきてはいるがまだ3割には到達していないという状況である。

このような状況を世界と比べるとどのように見えるのか。

まず人間開発指数（「生活の豊かさ」の水準を計る指数）について見れば、日本は8位でトップ10に入っている。だが、ジェンダー・エンパワーメント指数（女性がその社会の意思決定に参画しているかどうかを示す指数）は58位。

もう一つ、ジェンダー・ギャップ指数（経済・教育・保健・政治の四つの分野を対象としてどれくらい男女間に格差がついているかに焦点をおいて出される指数）はさらに悪く、130カ国中98位（2008年度）である。「特に、政治分野および経済分野における男女差が大きいため、このような低い順位になってい（る）」という（男女共同参画局『共同参画』平成21年1月号 http://www.gender.go.jp/main_contents/category/kyodo/200901/200901_10.html）。

このような中、2009年8月18日、国連は「女性差別撤廃条約の日本の実施状況について、勧告を盛り込んだ総括所見を公表し」、「女性差別解消に向けた日本政府の取り組みが進んでいないことを、厳しく指摘」している（『読売新聞』2009年8月25日 <http://www.yomiuri.co.jp/komachi/news/mixnews/20090825ok02.htm>）。

3. 女性研究者の現状—『男女共同参画白書』(平成21年版) から

[キーワード； 高等教育における男女間格差、女性研究者・トップの少なさ]

日本における女性研究者数および研究者に占める女性の割合は、世界と比較してみると36位と、女性研究者の割合が今もって少ない状態にある。世界と比較しても日本は著しく厳しい状況にある。

「大学教員における分野別女性割合」を見ると、最初に分かるのが家政の分野に圧倒的に女性が多いということ。また、人文・社会科学等の文系領域は女性が比較的多いが、理学・農学そして工学分野にいたっては女性が極めて少ないということである。

また、職位で見ると、助手・助教に女性の割合は多いが、講師・准教授・教授と職位が上

がるにつれ女性の割合が著しく落ちていく。

今日においても大学という場においては、女性教員がキャンパスのどの学部でも集団として存在するということが非常に困難な状況にあるということが分かる。

さらに「本務教員総数に占める女性の割合（初等中等教育、高等教育）」の図から、校長、学長の割合を見てみたい。まず、小学校において女性の教諭は半数以上を占めているのに、校長は17.8%。校長の女性の割合の少なさは約5%と、中学校も高等学校も同様である。大学においても先に述べた通り、助手は非常に多いけれども、職位が上がれば上がるほど女性は少なく、学長にいたっては8.1%となっている。大学のトップに立つ女性の割合は、極めて少ないということが分かる。国立大学で女性が学長に初めて就任したのは、1997年のことである。

4. 津田塾大学での取組—女性研究者支援センター

【キーワード：女性研究者支援、世代連携、理文融合、7つの目標、国際シンポジウム、夏の合宿】

上のような日本の雇用状況の中で、さらに高等教育界において、女性がどのようなところに置かれているかを考えた時に、現状を少しでも改善するために何をしていくべきなのか。

高等教育機関や研究所における女性研究者の割合を伸ばすべく、文部科学省が、平成18年度から女性研究者支援モデル育成事業という取組を開始した。

津田塾大学では、世代連携と理文融合を二つの柱にして、平成20年度に女性研究者支援センターを設置し、女性研究者支援モデル育成の取組を開始した。本取組を開始するにあたり、次の七つの目標をミッションステートメントとして掲げた。

- ①出産等を原因とする女性研究者の不本意な「研究活動の中断または中止」を廃止する。
- ②大学院進学率を情報科学科で25%にする。
- ③文系学科から理系及び理文融合分野の大学院進学を目指す学生を毎年5人育成する。
- ④情報通信分野の専門職に進む割合を16.3%程度までに増加させる。
- ⑤学部生、大学院生による学会発表件数を10件以上にする。
- ⑥理系学科の女性教員比率を33.3%に近づける。
- ⑦シンポジウム（年2回）やワークショップ（年1回）を実施する。

（津田塾大学女性研究者支援センターのHP参照。<http://cwr.tsuda.ac.jp/activities/unit.html>）

充実した研究支援環境を提供し、理文融合のプログラムを推進することが主な取組内容である。また、中高生、大学生、大学院生、研究者のつながりを世代連携という形につくって、研究者になっていく女性たちを掘り起こしていこうという取組でもある。

テクノロジー分野で働く女性研究者支援については、国内に限定して考えるだけではなく、海外ではどのようにしてテクノロジー分野の女性を支援しているのかというお話をうかがうために国際シンポジウムも開催している。

また、「夏の合宿」では、高校生を対象に情報科学や数学のワークショップを二泊三日で開催している。

5. 津田塾大学での取組—ライティングセンター（※当日講演の文字化部分）

【キーワード：書く力、コミュニケーション力、社会貢献、リーダーシップ、キャリア教育】

津田塾大学では、平成20年11月に、学生の日本語を書く力を養成する場としてライティングセンターを設置しました（詳細は津田塾大学ライティングセンター HPを参照。<http://twc.tsuda.ac.jp/>）。

平成20年度の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択された、「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」という取組で開設したものです。

津田塾大学では、英語教育に力を入れています。この取組では日本語を書く力を様々なプロジェクトを推進する過程でしっかりと身に付けられる「仕掛け」を作りたいと考えました。ライティングセンターでは、文章の個別指導を行うほか、多くの種類の「日本語ライティング講座」や講演会などを開催しています。同時に学生主導型プロジェクトというものを支援する機能も担っています。

総合的なキャリア教育を推進し、女性のリーダーシップを育成するという趣旨で、本取組を教育GPに申請しました。言葉の力とプロジェクト推進力を組み合わせる取組ということで、学生のコミュニケーション力を高めるとともに、リーダーシップスキルを身に付けて社会に貢献できる女性の育成を目指しています。例えば、「書くということと私」という講演会シリーズでは、書くことを職業にするさまざまな分野の方々、例えば、映画監督、詩人、編集者、記者、翻訳者など、多様な職種の方々にお越しいただいて、講演者のキャリア世界を学生たちに感じ取ってもらうように工夫しています。

それから、「日本語ライティング講座」というのは単位にならない講座ですけれども、6限という時間帯（通常の授業は5限まであります）に書くことを職業とする多彩な講師陣に、20人程度の学生たちが実際に書いたものを読んでいただいたり、批評していただいたりする過程で、日本語を書く力、言葉の力を育めるよう「日本語ライティング講座」のプログラムをつくっています。また、正課科目の中にも「日本語ライティング」という科目を増設して、日本語を書く力を少人数のクラスでさらに培っていますが、このような取組をこの教育GPで展開しているところです。

細かい内容につきましては、これまでに実施した活動を紹介するファイルを2冊、高山先生にお渡ししていますので、それをご覧いただければと思います。本取組では私自身が取組責任者になって活動しておりますので、お話ししたい内容もたくさんありますけれども、時間の関係上少しだけライティングセンターのHPに接続して活動内容をご紹介しますと思います。

このようなホームページですが、ライティングセンターが実施している活動内容、例えば、「日本語ライティング講座」、講演会等をご覧いただけます。個別指導においては「マイ・ライティング・ポッド」というものを設けて、学生たちが「マイ・ライティング・ポッド」に自分たちの書いたものを送って、そこにコミュニティーができるような仕掛けも作っています。

活動に関してもこのように並んでいますので、「書くということと私」シリーズでどのような

方々にご講演をお願いしているかご覧いただけます。歌人、企業の人事部人材開発の管理職者、映画監督、エッセイスト、翻訳者、記者、編集者など本当に多くの分野の方々にお越しいただいて、学生がキャリアについて理解を深められるよう計画しています。

6. 海外での事例—グレース・ホッパー会議（Anita Borg Institute主催）に参加して

[キーワード；テクノロジー分野の女性研究者支援、ロールモデル、リーダーシップ、女子大学のエッセンス]

“I am a technical woman”(〈ビデオ上映のURL〉 <http://www.anitaborg.org/news/video/>)

グレース・ホッパー（Grace Hopper）というアメリカ人女性は、コンピュータ・サイエンティストの草分け的存在である。この分野のパイオニアであるこの女性の名前を冠した会議が、1994年から開催されている。その会議を企画・運営しているのがAnita Borg InstituteというNPOである。

テクノロジー分野で働く女性たちをダイナミックな方法で支援していく会議で、世界中から1600人もの女性研究者、学生たちが参集した。

そこではロールモデルを積極的に提示し、また、具体的な問題への解決策、例えばメンタリングの方法などを提示している。さらにリーダーシップ養成に関しても、どのようにして影響力を持つ人物になれるのかというテーマでワークショップを開催していた。まさに女性たちの熱気が横溢し、女子大学のエッセンスがここに凝縮しているように直感した。

本会議の詳細については、下記の参考文献に所収された「付属資料」である、拙稿「グレース・ホッパー会議(Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference)大会参加記」を参照。

【参考文献】

高橋裕子「女子大学だからできること—女性を伸ばす〈学び〉の環境」(『武庫川女子大学教育研究所 研究レポート』第40号、3-30頁) 2010.

7. 教員として教学及びアドミニストレーションの両面から意識していること

[キーワード；エンパワーメント、ロールモデル、リーダーシップ、世代間の連携]

日々、教員として意識しているのは、次のようなことである。

- 学生の潜在的な力に常に敏感であること（可能性を否定しない）
- 励まし、期待すること
- 様々なロールモデルを積極的に提示すること
- 女子学生を中心に位置づけ、注目すること
- リーダーシップを育むこと
- 世代を越えた連携を模索すること

○とりわけ同窓生との連携を実現すること

このような思いが、女性研究者支援センターやライティングセンターの設置や運営、また、本日の講演ではご紹介できなかったが、「学生支援推進プログラム：在学生/卒業生を対象としたシームレスな就職支援プログラム」(文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラム)などのプログラムに責任者として取り組む上で、私自身のバックボーンとなっている。

8. むすびにかえて—アドリエヌ・リッチ講演「女性の大学の魂」(『血、パン、詩。』大島かおり訳、晶文社(1989年))から

「…世の中の大部分は、女の場所ではなくて、女を否定する場所だということ、そして女は、女の場所とは何でありうるかを確かむ必要があるということ——そこに引きこもって庇護されるのではなくて、力を与えられ、みずからの価値と全体性(インテグリティ)に確信をもって、そこから前進していけるような場所として。わたしはそのとき、それが意味しているのは美しい寄宿舎ホールや庭園があることではなくて、魂をもつことなのだと悟りました。」(288～289頁)

アメリカの女子大学スクリプス・カレッジで、詩人アドリエヌ・リッチが語ったように、女子大学で「魂をもつ」経験をするからこそが、女子大学の存在意義であろう。

『男女共同参画白書』で見たとおり、日本社会の多くの場は、まだまだ女性が職業人として生きていくうえで、たいへん難しい状況にある。そのような中でとりわけ女子大学は、どれほど女性に力を与え、前向きなメッセージを語りかけていくことができるのかが問われている。学生たちが「魂をもつ」ような、すなわちこれからあらゆる問題に対峙して生きていくための堅固な基盤をつくる、そういう空間と時間を提供できるように、女子大学は時代とともに変革していかななくてはならないと考えている。

【付記】

この公開講演会は、平成21(2009)年度筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部特別研究助成費を受けて開催したものである。

[2009年度 女子教育研究会の活動について]

前年度に引き続き、毎月の研究会と2回の公開講演会を開催したほか、津田塾大学、京都橘大学、日本女子大学都立3大学の研究所・施設の視察、本学卒業生対象アンケート調査の実施に向けての調査書作成などを行った（下記「活動記録」参照）。

女子教育研究会 平成21（2009）年度 主な活動記録

活 動	開 催 月 日	内 容
第1回研究会	2009年4月15日(水)	人間文化研究所「年報」20号投稿論文内容の検討。
第2回研究会	2009年5月13日(水)	同 上
第3回研究会	2009年6月24日(水)	今年度の活動計画の検討。 第2回「女子大学研究会」参加報告。
第4回研究会	2009年7月22日(水)	卒業生対象アンケート調査内容の検討。
第5回研究会	2009年8月18日(火)	同 上
第6回研究会	2009年9月30日(水)	同 上
第7回研究会 (公開講演会)	2009年10月27日(火)	講演題目「戦後新制大学発足期の女子学生像～雑誌『学園評論』の記事を手がかりとして～」 講師：中西直樹(本学文学部人間福祉学科准教授) ※本年度特別研究助成費により開催 (参加者：約30名)
シンポジウム 参加	2009年10月31日(土)	武庫川学院創立70周年記念シンポジウム「女子大学で学ぶとは」(於、武庫川女子大学)(高山百合子) ※第1部基調講演は、高橋裕子氏(津田塾大学教授・研究支援担当学長特別補佐)「女子大学だからできること：女性を伸ばす〈学び〉の環境」
第8回研究会	2009年11月10日(火)	卒業生対象アンケート調査項目の選定。 後期講演会の講師選定。
第1回視察	2009年11月27日(金)	津田塾大学津田梅子記念交流館、津田梅子資料室(緒方知美)
第9回研究会	2009年12月7日(月)	卒業生対象アンケート調査項目の選定。 平成22年度特別研究助成費申請内容、視察先検討。
第10回研究会	2009年12月14日(月)	卒業生対象アンケート調査項目の選定。 平成22年度特別研究助成費申請内容の検討。
第11回研究会	2009年12月22日(火)	卒業生対象アンケート調査項目の決定。 視察先決定。
第12回研究会	2010年1月18日(月)	公開講演会準備
第2回視察	2010年2月25日(木) ～26日(金)	京都橘大学女性歴史文化研究所、日本女子大学現代女性キャリア研究所 (大橋健治、緒方知美、喜多村百合、高山百合子)

第 13 回研究会	2010 年 3 月 4 日 (木)	視察反省会
第 14 回研究会 (公開講演会)	2010 年 3 月 25 日 (木)	講演題目「女子大学の存在意義—教学およびアドミニ ストレーションの両面から—」高橋裕子氏 (津田塾大学 教授・研究支援担当学長特別補佐) ※本年度特別研究助成費により開催 (参加者：約 35 名)

《表作成；緒方知美》

女子教育研究会

Chikujō Association for the University Education of Women

代表：高 山 百合子〈現代教養学科 教授〉
大 橋 健 治〈現代教養学科 講師〉
緒 方 知 美〈アジア文化学科 講師〉
喜多村 百 合〈アジア文化学科 准教授〉
竹 山 優 子〈筑紫女学園中学・高等学校
庶務会計課 主任〉
平 井 和 宏〈総務課 課長補佐〉